

総務常任委員会視察報告

1. 視察日程 平成28年10月4日(火)～6日(木)
2. 視察場所 岐阜県下呂市 下呂市立金山病院
福井県今立郡池田町 池田町役場
3. 視察参加者 泥谷 修 岩尾 育郎 河野 正治
渡辺 雄爾 加来 喬 田原 祐二
(随行) 田城 貴代
4. 視察事項

(1) 下呂市立金山病院 (建設経緯と施設概要、運営について)

杵築市立山香病院本館は昭和55年に竣工、築35年以上が経過し建て替えの検討が必要な時期に来ている。そういう状況の中で、市は、本年に入り民間委員を中心とした「杵築市立病院あり方検討委員会」を設置し検討を重ねている。

下呂市立金山病院は、旧金山町が昭和32年から運営してきた病院で、昭和40年代に改築した建物が老朽化したため改築を行い、平成24年に開院した。ローコスト・ハイクオリティを合言葉に取り組んだ2段階発注方式や、充実した機能内容等について研修を行った。

1 下呂市の概況

岐阜県のほぼ中央部に位置し、旧増田郡内の4町1村(下呂町、萩原町、金山町、小坂町、馬瀬村)が合併し誕生した。平成28年4月現在、人口34,191人、高齢化率は37%で高齢化と少子化が進んでいる。

2 下呂市立金山病院の整備概要等について

研修内容は別添資料参照

特記事項については、以下のとおり。

- ①平成21年5月1日に、アドバイザーとして、NPO法人医療施設近代化センターと業務委託契約を締結する。期間は21年度の基本設計から22年度の実施設設計、23・24年度の施工管理までを含む。これは、県内の民間医療機関が、このNPOからアドバイスを受け、数億円の建設コストを削減したことを知り協力依頼したもの。また、病院職員は工事には素人で、設計や建設業者の言いなりで工事費が嵩むのを避けるとともに、専門的なアドバイスを受けるため。

実施設計から工事完了までのアドバイスとし、委託費用は工事費の1.5%相当額の2,100万円。

事業費は20億円以内に設定。これは病院の平均収入額の2倍以内とし、高くなると公債費の支出等が後年の経営に影響するため。なお、当初の事業費は、病院自治体協議会の中の病院建設センターによる1床当たり3,000万により、30億円で計画していた。

- ・平成21年5月18日に、設計プロポーザル方式審査委員会設置要綱を制定。「日本一・ローコスト・高価値の病院づくり」を目指し、設計業者を公募型プロポーザル方式で選定するよう決定。

- ・翌日に、第1回審査委員会を開催。委員は9名で、委員長には、城西大学経済学部准教授の伊関先生にお願いし、まちの病院がなくなると題した伊関先生の講演を聞く。

伊関先生とNPO法人医療施設近代化センターを主体とした病院建替プロジェクトが始動する。

- ・その後、技術提案者として選定するための参加者の第1次募集や参加表明業者5社の書類審査を行い、技術提案者に提案書及びヒヤリング実施の依頼

をし、技術提案者の実績病院の視察も行った。

10月25日、第3回審査委員会に合わせ、4社の公開プレゼンテーションを実施し、最適な設計候補者及び次点者を決定した。100人近くの参加者があった。

- ・その後、基本設計業務の委託契約を（株）東畑建築事務所と締結し、基本設計の調整会議を10回開催した後、平成22年3月25日に基本設計業務委託が完了した。

②実施設計は、引き続き、同じ（株）東畑建築事務所と締結。

③施工業者の選定については、基本設計を終えた時点で建設費の概算事業費を算出し、これをもとに建築施工業者を公募型プロポーザル方式で選定する二段階発注方式を導入。

これは実施設計や詳細設計を進めるうえで、施工業者のローコスト建築の技術等を設計業者と施工業者が共に協力し、設計に反映することを目指したもの。

- ・その後の施工業者選定の手順は、基本設計業者選定時と同じ。

請負業者選定プロポーザル審査委員長には伊関先生が就き、6社が参加した公開プレゼンの結果、戸田建設（株）が選定された。

- ・プレゼンには、地元発注率を提案してもらおう。施工会社の35%の提案に対し、実績は39%を達成。

④医療機器の購入費は3億7,400万円。使えるものは持ってくるようにし、新病院への移転期間は周囲の病院に機器使用を依頼した。

3 所感

・新病院建築の全工程にわたり、城西大学経済学部准教授の伊関先生とNPO法人医療施設近代化センターが重要な役割を果たしていると感じた。2段階発注方式には欠かせない存在であり、最初から最後まで専門的な知識を有した人が関わってこそ、ローコスト・ハイクオリティが実現できるのであろう。

・病院施設の使い勝手についても、患者目線、医者目線で配慮されており、救急患者に対しても、救急車で搬送されてから手術まで、最短距離で治療や薬の投与が出来るよう建物の造りなどに工夫がされている。

・下呂市立金山病院は、そのまま旧金山町に建設されたが、下呂市には中部に病床数206床の岐阜県立温泉病院があり、南部に位置する下呂市立金山病院とは棲み分けができていたとのこと。下呂市内部では、混乱もなく新病院建設が行われた模様。



(2) 池田町役場（地域資源を生かした循環型農業とアンテナショップの取組みについて、観光・交流・定住政策等について）

池田町は、福井県の山間部で地域資源を生かした独自の循環型農業を実践している。それを基盤に、環境、観光、交流、定住、子育てなど多方面にわたり、町民参加の自立したまちづくりを行っている。本年4月には、森林を活かした日本最大の冒険の森「ツリーピクニックアドベンチャーいけだ」がオープンし、話題となっている。

今回は、まちづくりの手法等について、現地視察を含め研修を行った。

1 池田町の概要

福井県の東南部に位置し、1000メートル級の山々に囲まれた豪雪地帯の盆地で、町の92%は森林が占めている。

平成27年10月時点の人口は、2,638人で、高齢化率は40%を超えている。

平成の大合併には参加せず、町単独の道を選択している。

2 農村力を生かした「まち育て」、各種施策の状況について

研修内容は別添資料参照

特記事項については、以下のとおり。

① 地域資源を活かした循環型社会づくりに取り組んでいる。

・現町長が平成11年頃から始めたまち育てのキーワードの一つが「百匠一品」である。一つひとつの小さな力を持ち寄るといふほかに、力を合わせる、心を合わせることで、「一つの品格」を生み出そうというもの。

・町独自の認証制度「ゆうき・げんき・正直農業」により野菜栽培。3つの基準（黄：低農薬無化学肥料栽培 赤：無農薬無化学肥料栽培 青：完全有機栽培）ごとにシールを交付、看板を立てて収穫する。池田町農業公社が指導。*宮崎県綾町に学ぶ

・池田町産マーケット「こっぼい屋」で、百匠一品の事業化戦略を展開。

*こっぼい…池田弁で「ありがたい」の意。

平成11年に福井市内の大型量販店内に10坪のアンテナショップをオープンし、池田町の農林産物の販売を開始。百匠一品（少量多品目の農林産物を商品化）をブランド化し販売。現在では、店舗を20坪に拡大し、年間1億3千万を売上げている。*宮崎県綾町、大分県大山町に学ぶ。

・環境保全型農業としての米づくり運動。福井県はコシヒカリ発祥の地であり、おいしいだけでなく、ランク付けをして販売。町内60%が加入。販売はJAでなく、(株)協同屋を設立し、全量買い上げ。

宅配、町内の「まちの市場こってコテいけだ」、福井市内「こっぼい屋」で販売。(60kg当たり平均19,000円)

- ②・環境への取組として、環境向上基本計画を策定。役場の職員やコンサルは入らず、100人の町民で作る。(全世帯の10%)

それを基本に、エコポイント事業としてマイバック運動、地域通貨制度などに取り組む。

- ・農業と環境の取り組みとして、食Uターン事業を実施。食卓から生ごみを出し、堆肥となり野菜を育て、また食卓に戻る。

NPO法人環境フレンズを設立し、町民が回収し、堆肥センターに持ち込み、農業公社で牛糞、もみ殻を入れ発酵させ堆肥にする。堆肥は、

「^{どこんじょう}土魂壤」3兄弟(液肥、堆肥、バイオ)として販売。

(*どこんじょう…土壌に心(魂)をいれる) この堆肥を使い、有機認証農業をやり農産物がこっぼい屋の店頭に並ぶ。所謂、循環型農業となる。

- ・平成17年より、エコキャンドルを町ぐるみで行っている。廃油を使い、ふれあいサロンで芯づくりを行い、地域総出のイベントとなっている。

- ③ 農業や地域資源を活かした観光振興として、「(株)まちUPいけだ」、「いけだ農村観光協会」を設立。共助の組織を作り、民間のセンスで行政が後ろ盾になって運営するのが主旨。

「(株)まちUPいけだ」は、過疎債で町が1億円を出資し、スピーディーに事業展開が出来るように会社組織にし、色々な観光の仕掛けができる装置としたもの。

指定管理者として、「ツリーピクニックアドベンチャーいけだ」、「まちの市場こってコテいけだ」、「移動販売車コテいけ号」を運営し、町民やUターン、退職者など40人の雇用を生んでいる。

「いけだ農村観光協会」は、主に情報発信事業に力を入れ、行政、観光協会が連携し、県内外のメディアに向けた情報発信を戦略的に実施。(テレビ放送年20回、新聞記事年100回)

- ④ 平成26年に町役場に**特命政策課**を新設。そして、まちを活かす「^き木

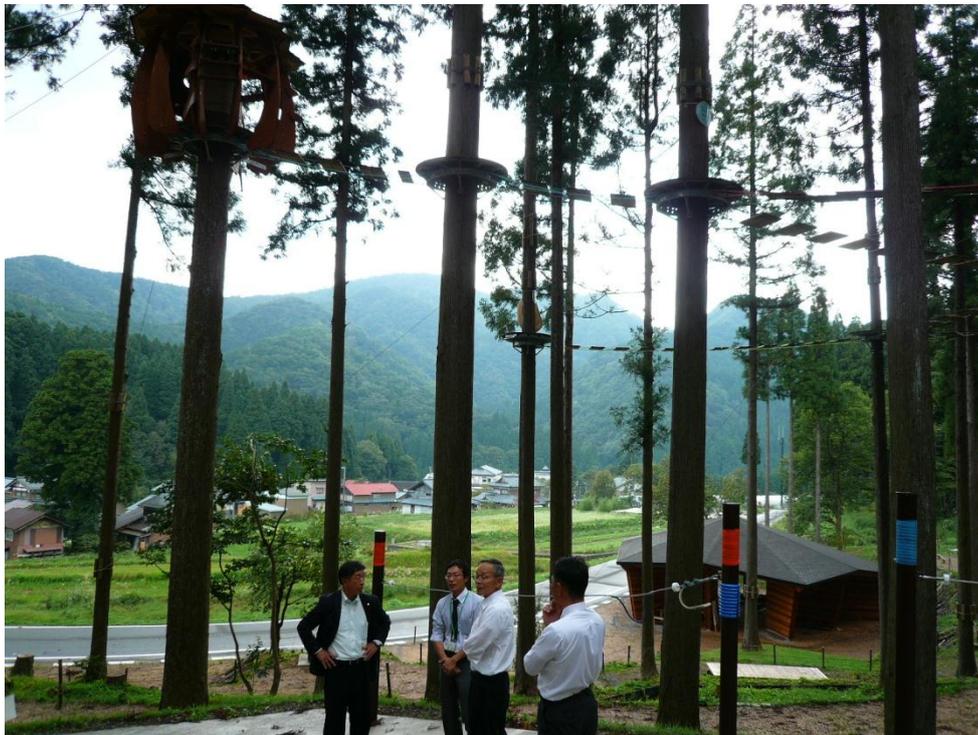
^{ぼう}望のまちプロジェクト」を立ち上げる。面積の90%以上を占める森林を活かして、人も家族も世代も、木や森でみんなつながっていくような仕組みを考えている。

その拠点施設が、「ツリーピクニックアドベンチャーいけだ」である。平成26年4月の構想から丸2年、平成28年4月に供用開始。総工費

7億5千4百万円。利用者数は年間3万人、1億円の売り上げを見込んでいる。

中でも、メガジップラインは、山の尾根間に張られたワイヤーを滑空する全長1km、最大地上高60mの規模で、日本最大級を誇る。その他、杉の大木の樹上に広がるジャングルジムのアドベンチャーパーク、川の源流を下るアドベンチャーボート、旧キャンプ場をリニューアルしたアウトドアエリアなどがある。

また、廃校の小学校を活用した農村de合宿キャンプセンター、木のおもちゃで遊ぶおもちゃハウスこどもと木などを設置し、全ての施設がプロジェクトの仕組みを反映したものとなっている。



3 所感

- ・北陸の山あいの豪雪の町であるが、雪に埋もれずキラリと輝いている町という印象である。

真新しい「ツリーピクニックアドベンチャーいけだ」の発想者も町長ということであり、平成9年、39歳で就任以降、次々と新しい施策を生み出している。子どもからお年寄りまで全ての町民の幸福と生きがいを考え、共にまちづくりを進めているという感じである。

- ・一昨年には、町長直轄の「特命政策課」を新設しており、民間感覚でスピーディーな行政運営を実践している。町が出資した「(株)まちUPいけだ」も同趣旨である。小規模自治体故に可能な面もあるが、参考にすべきだと思う。
- ・池田町には、現在、15人の地域おこし協力隊員がいるとのこと。また、

「(株)まちUPいけだ」では、指定管理等により 40 人を雇用しており、各種施策を通じ町民の働く場を確保していると感じた。

- まちづくりに関しては、九州では、宮崎県綾町や大分県の大山、由布院、安心院などで学んでいるとのこと。恐らく、参考になる全国の市町村からノウハウを吸収していると思われる。
- 合併をせず自立を選択した池田町は、山あいの盆地という地形的理由もあろうが、これまでのまちづくりを、町長を先頭にみんなで進めてきたという誇りと自信が町全体に感じられる。

合併した自治体杵築市も、同じような気概をもって、まちづくりに取り組むべきであると感じた。